公開講座『外国語への招待』

1999年7月24日(土)　於 愛知大学車道校舎

講師　愛知大学教授　荒　川　清　秀
講師　愛知大学教授　千　種　　堅
（司会・構成　愛知大学教授　高橋　秀雄）

司会　愛知大学では1998年に国際コミュニケーション学部が開設され，今年4月には，文学部の方で従来，文学部文学科となっておりましたのを，日本中国言語文学科と欧米言語文学科という2つの学科に改組いたしました。それを記念いたしまして，本日は国際コミュニケーション学部の荒川清秀先生，文学部の千種堅先生においでいただきまして，「外国語への招待」というテーマで講演いただくことになりました。

最初に，どんな趣旨で講演会を開いたのかということをお話し申し上げたいと思います。ここにお集まりの皆さんは，たぶん外国語を勉強することがお好きで，なかにはいろいろな外国語を勉強されてきた経験をお持ちの方もおられると思います。今日お招きしました荒川先生，千種先生お二人も，外国語がたいへんお好きな方だということです。私はこのたび，国際コミュニケーション学部の方で外国語を教えるようになりまして，とにかく外国語を4年間一生懸命やるという学部なので，学生たちの反応を見ておりますと，必ずしも外国語を勉強することが好きな学生ばかりではないということに気がつきました。なぜ外国語を学ぶのかということが我々の問題とはちょっと違うような仕方で，今，学生たちには問題になっているということです。つまり，外国語を学ぶことに特に興味があるというわけではないし，好きでもない。しかし，どうしても，今，外国語を学ばなくてはいけないのだという非常に

追い詰められたような気持ちで我々の学部に入ってきて勉強している学生さんがたくさんいるのです。

それから，もうひとつ感じられることは，外国語を学ぶというのは，イコール英語を学ぶことだと考えている学生さんがたいへん多いということです。もちろんそういう学生さんでも，英語以外に外国語があるということを知らないわけではないが，今，勉強しなくてはならないのは英語である，何とかして英語をやらなくてはいけない，と考えている。なによりも，英語の力に自信がないのですね。中学校，高等学校と英語を勉強してきたが，相変わらずやはり読めないし書けない。それから聞けないし話せない。だから，大学へ入って英語をしっかりやりたい。英語以外をやる余裕もないし，やる気持ちもない。そういう人がたいへん多いのです。

私たちの国際コミュニケーション学部では，外国語をやるためには，どうしても英語だけではなくて，英語プラスもう一つの外国語，2つの外国語を是非とも4年間でマスターしてもらおうということでやっておりますけれど，どういうふうにやったらいいのか，どういうふうに学生さんたちにその意味を知らせたらいいのかということは，非常に大きな問題になっています。

本日，荒川先生，千種先生お二人の，外国語に関してはたいへんベテランの先生にお話しいただくということは，その意味で私たちにとってもたいへん興味があります。

それでは，荒川先生からお話しをいただきます。荒川先生は1977年にこの愛知大学で教えるようになりまして，さらに，ご承知のように，ラジオ講座で中国語の入門編を担当されました。その他に例えば，最近1997年には『近代日中学術用語の形成と伝播』という難しい題名の本を出されまして，こういう学術書にしては広く読まれ，次第に評価されまして，さまざまな所で論じられています。この本は先生でなければ書けないもので，単に中国語だけではなくて，いろいろな外国語に関する興味をもち，フランス語，ドイツ語，英語等勉強されている，荒川先生でなければとてもできない仕事ではないかと，思っています。

千種先生は，もともと東京外国語大学ではロシア語を勉強され，卒業して会社に勤められましたが，今度は独学でイタリア語を勉強され，この勉強も猛烈な勉強をされたのですが，現在では，現代イタリア文学の紹介者として，日本で最も有名な方となっています。積み上げると背丈になるくらいのイタリア語，ロシア語の翻訳書を出されていますが，書かれたものとしては，もう絶版になっておりますが，『ダンテの末裔たち』（1977年）が三省堂から，また徳間書店の『イタリア人の発想』などがあります。それから，現在手に入るものとしては，中公新書の『モラヴィア』があります。先生は，夏になりますと，千葉県の館山の方で，毎日，仕事と泳ぎをされているのですが，今日はわざわざこちらにおいでくださいました。

お二人の先生に，これからだいたい1時間くらいずつお話しいただいて，そのあと質疑応答とさせていただきたいと思います。それでは，荒川先生からお願いいたします。

荒川　皆さんこんにちは。私は愛大に来て，もう23年目になりますし，中国語を始めてから30年というと，年がわかると思いますが，昔，大阪にいまして，大阪で民間の講習会で教えたことがあるのですが，その時は，本当に年配の人たちばかりで，非常にかわいがっていただきまして，そういう人たちをどうやって，興味をなくさずに中国語を続けてもらえるかということで，とても勉強になりました。それが大学に入ってからも，学生たちの興味をつなぎながらどうやって続けさせられるかと，そういう教え方を考える基になったのです。ですから，今日も，いろんな層の方が来られているので，非常に嬉しく思っております。

さっき高橋先生からいろいろ私たちの学部の宣伝とかありましたが，皆さんの中には，おそらく私が中国語の話だけをすると思って来られた方がいると思うのですが，のっけからなんですが，実はこの6月に私はフランス語の検定というのを受けたのです。4級だったのですが，つい先週，合格通知が来ました。これは実は試験を受けた段階でわかっていたのです。というのはフランス語検定というのは，終わったときに解答を配るのです。私はそれは見たくないと思って見なかったら，他の人たちが皆その場で採点をしだすのです。それで採点しなければいけないのかなあと思って採点したら，全部できていたのです。それで一応点数はわかっていたので，先週，合格通知をもらってもあまり喜びはなかったのです。

なぜこんな検定を受けるのかということなんですけれど，フランス語を始めたのは実は2年前で，1997年の春なんです。この時は，ラジオ講座を中心にやりました。NHKラジオです。ラジオ講座というのは，自分が担当したから言うのではないのですけれど，いろいろ工夫されていて，いろんないい先生が出てきて講義をされるので，先生が変わるたびにやり方が違うし内容も違うのでずっと聞いて来たのですが，ラジオだけでするというのは，非常に難しいのです。さっき千種先生は，独学でイタリア語をされたということで，どんなことをされたのか後で聞いてみたいと思っていますが，ラジオを聞き続けるというのだけでも大変だと思うのです。まず一つは，聞き続けることはできるんです。だけど，聞いているだけでいいかというと，聞いているだけでは絶対うまくならないんです。というのは，私の同僚のある先生は朝の7時から9時まで，ずっとラジオ講座をかけっぱなしで，各国語のラジオ講座を聞くらしいのです。各国語というのは，イタリア語，ドイツ語，中国語と聞くのですが，だいたい聞きっぱなし，聞き流しにするというのです。ぼくは，これは実は一番非効率なやり方ではないかと思っています。

ラジオ講座というのは，聞いているときに最大限自分のいろんな所を動かさなければいけない。先生が1回読むところを2回3回読んでもいいんです。1回だけ返すというのではなくて，ゲストが読んでいるときも発音して，終わった後に2回くらい発音する。それくらいフルにその時間に自分のエネルギーを投入しなければいけないので，聞き流すというのではきっとうまくならないと思っています。

何年か前にNHKラジオの英語会話を聞いていて，その英語会話を聞いた時に，ゲストが

読んだ後に2回くらい繰り返せるように時間がとってあるのに感心しました。あれは休んでいいのではないのです。1回やって，もちろんなかなかついていけない人にとってはその時間がいるのですけれど，余裕のある人は繰り返せばいいのです。それを1回聞いて終わりにするというのではもったいない。それくらいの集中力で勉強しなければいけないということです。

ということで，フランス語講座を1年半やりました。1年半ずっと独学できたのですが，なにかどうもうまくならないというか，やったという実感がないのです。それで，去年の秋から，私たちの学部にフランス人の先生がいるのですが，その先生の授業に出させてもらっています。大学の中というのは，結構お互い同士が授業を聞きあうことがあるのです。これはほんの少数かもしれませんが，私の授業にもかつて聞きに来た人がいて，私は誰がきても歓迎しますし，あまり大きな声では言えませんが，一般の人が潜っていただいてもいいじゃないか，ちょっと手続きが遅れたとか，いろんな関係でできないとか，たくさん来られては困りますが，まいいじゃないかということで。学生でも留学から帰ってきて勉強どうしようかなあと思っているのですというと，今日の午後の授業から来なさいとか言って，出させることがあります。お互い同士授業を見学したり授業に来てもらうというのは非常にいいことだと思っているので，私も人の授業を聞きにいったりするのです。

それで，そのフランス人の先生の授業に出させてもらったのです。これはコミュニケーション学部という私たちの新設の学部ですが，学生は20人くらいしかいませんので，一緒に当ててもらってやってきました。そして，同時にラジオ講座を聞いていくという。これをやりながら今年に入ったわけですが，今年に入ってから，ひとつ検定試験を受けてみようと思ったのです。実は検定というのは，前にドイツ語も検定を受けているのです。なにか検定ばかり受けているという。ドイツ語の時は，実は3級まで取っています。私は語学というのは3級まで取らないとある程度やったとはいえないと思います。4級もかなり大変といえば大変ですが，3級くらいのレベルが，やはりやったということじゃないかと思うのです。そのわりには，英語は全然何級も取っていないし，中国語も全然取っていない。今から取ったら，何級取れるかわからないのですが，2級くらいしか取れないかもしれませんね。なかなか自分は取らないくせに，他の語学だと気が楽なんでしょう。落ちてもいいと思って受けるということがあって。だから，検定荒らしみたいなところがあって，あちこち行って受けるのです。

実はその検定試験というのは6月にあったのですが，その前の日がぼくの公開講座の日で，その時は「健康」という言葉の語源の話をしました。これは豊橋ですけれど。これは健康の話だと思って来られたら困るのですけれど，「健康」という言葉が，どこでどういうふうにして生まれたかという話なのです。これはいずれどこかに書きますが，日本でできた言葉なんです。16世紀にできるのです。この話をした次の日が検定だったのです。だから，これはちょっと困ったなあと思ったし，授業自体が忙しいといえば忙しいのです。どうやって勉強

しているのかと言われますけれど，上の娘が，去年英検の3級を取った時に，英検の3級というのは最後に面接があるのです。その面接の問題というのを，私が子どもに対していろいろ練習させてやりました。そうしたら，子どもに，「お父さんもフランス語検定受けてみたら。2カ月と決めて自分で計画してやったらできるよ」と言われたものですから，ひょっとしたらできるかなあと思って，子どもに言われて受けようかなあと思ったのです。

その時は，仏検対策何とかという分厚い300ページくらいの問題集を2回やりました。だから，試験の時にも，これは新傾向の問題だということがわかりました。この問題は今まで出なかったとか。この問題は3級レベルだから，捨ててもいいというのもあったのです。それで，その2問がちょっと不安だったのですが，どっちもやまかんで当たりましたので，全部合ったのです。だから，試験というのは，ある程度過去の問題を研究すれば，絶対突破できる。ヒヤリングも2回やりました。テープを2回聞きました。受けたらなんとかなるだろうという受け方は，やはりよくないだろうと思うのです。受けたら絶対通ってやるという気持ちでやれば通るのではないか。何か受験対策ばかり教えているので，そういうノウハウみたいなものだけではいけないのですが。フランス語の先生に，ちょっとおたくっぽいなあと言われて，語学おたくかなあと思いましたけれど。この問題つまり，語学にのめり込むというのがいいことかどうかということは，後でちょっと触れます。

フランス語が2年と2カ月で4級というのは，別に早くもないのですが，一応，半分独学のように思っていますので，そういう時に目標を立ててやるというのが大事じゃないか。だから，中国語をやっておられる方でも，今度の中検なり，他のいろんなテストがありますけれど，そういうものを目標としながらやっていっていただきたい。そのためにどうするのかということは，後でちょっとお話します。

試験を受ける緊張感というのもなかなかいいものです。学生に混じってやる，学生と一緒に勉強するという緊張感というのもあって，先生だから当てないでくださいとは，絶対ぼくは言わないですし，当てて欲しいのです。フランス語の先生の方は，気を使って，あまり当ててはいけないかなあと思って，ぼくに質問するときは，「愛知大学の電話番号は何番ですか」と日本語で言わせるのです。こっちは，難しい質問をして欲しいんです。ドイツ語をやったときは，試験も全部受けましたし，レポートも全部出しました。受ける時は学生と一緒だと，こっちは恥も何も思いませんから，そういう気持ちでやりたいし，先生の方もそういう態度で接して欲しいなあということでやってきました。

何でフランス語をやるのかというと，これはさっき高橋先生からも話がありましたが，我々の学部というのは，フランス語と，中国語と英語とドイツ語なんです。こういう人たちを相手にして言語文化論というのをやることになっていまして，すでに1回やったのですが，ドイツ語とフランス語の話というのを入れないといけない，だから，ある程度やらなければならない。やりだすと，学生に負けたくないという気が出てきます。対抗意識が出てくるので

す。ドイツ語は一応3級までいきましたので，フランス語も是非そこまでやっておこうとおもっています。

他にも，何で先生は中国語をやったのか，ということをよく聞かれます。なぜやったのかというと，1967年～8年，中国で文化大革命が行われていた頃で，その頃は，別に深い理由はなくて，人があまりやらない言語をやろうと思いました。当時は，中国語をやって，例えば中国へ行くという，これだけで警察に追われた時代です。私の友だちなんかは中国へ行ってくると，警察に尾行されたと言っています。だから先見の明があったとか言われることがありますが，そんな考えは全然なかった。そういうのではなくて，なるべく人がやらないことをやってやろうというふうに思っていたのです。

けれど，そういう人間が今度フランス語やドイツ語をやると，「おまえは魂を西洋に売り渡した」とかというふうにいう人もいるわけなんです。これは半分冗談です。西洋のことをやっている人が中国語をやるというのは非常に異質で少数です。しかし，中国語をやっている人がドイツ語とかフランス語をやるというのは，何かやってはいけない，超えてはいけないようなものを超えているという，そういう意識があるのですかね。今，ラジオ講座中国語のテキストの後ろの所に「言葉と文化」というのを書いていますが，先月号かに人称代名詞というのを書いて，ドイツ語とフランス語の例をたくさん入れておいたのです。中国語で二人称で“您”というのがあるのです。普通体が“你”と言って，敬称が“您”と言うのですが，ドイツ語はduとSieが，フランス語はtuとvousというのがあって，これと同じだという説明が一般に行われているのですが，そうじゃないということを書いたのです。duとSieは，普通の関係から親しい関係になるということなんですけど，中国語は，これは北京に限られるかもしれないのですが，親と子の間においても，子どもは親を“您”と敬称で呼ぶよう教育するのです。こういうのは，duとかtuで育った環境ではとても考えられないだろうと思うのです。そんなことをちょっと書いたのですが，その部分は，削られてしまいました。

つまり，中国語をやっている人で，ドイツ語やフランス語をやっている人がそんなにいませんから，これはペダンティックだ，気取った感じで，学者っぽい言い方だからやめてくださいと言われてしまったのです。だから，中国語をやってて，他の言語をやるというのは，我々の中国語学会でもやはり異質なんです。でも，世の支那学者，昔風に言うと，世界をまたにかけてやってきた人たちというのは，結構フランス語をやっているのです。京都大学に高田時雄という人がいますが，その人なんかはフランスに留学して，フランス語で論文を書いて学位をとったというような人です。昔の人は，そういうふうにフランスの支那学というのは有名でしたから，昔はそういう所と関係があったのですが，だんだんそういうところと切れてきている。今の日本の中国語学というのは，本当に中国の世界だけに閉じこもっているようなところがあるのです。だから，ドイツ語の例を出すとかフランス語の例を出すというのは，非常に異質に見える。一時期などは，英語の例を出しただけで，「ここは中国語学会

だ。英語をなぜ出すんだ」というように反発する人もいたくらいです。それだけ閉鎖的な所がどうもあるんじゃないか，だから，それを打ち破りたいというのが自分の中にあったんじゃないのかという気がするのです。中国以外の世界を見ることによって，中国を違った目で見られる，中国のいい所も出てくる。腹が立つ所もたくさんありますね。でも，何かこう捨て難い魅力もあるというのが，だんだんよそと比べることによってわかってくるということがあると思うのです。

言語を学ぶ目的は何か。それは，一つは，どこか外国に行きたいこと。私の場合は，旅行をすることです。それから，言葉をやることで，その文化に対する興味というのが出てきますね。フランスに関する本があったら読んでみようかなとか，そういう気になってきます。私の好きな人に，鹿島茂という人がいます。共立女子大の先生で，最近バルザックの選集というか翻訳を開始しましたが，この人が昔，『子どもより古書が大事と思いたい』（青土社）という本を出しました。この人は，古書のコレクターなんです。実は，私も古書のコレクターで奥さんに内緒でこっそりたくさん高い本を買っています。これは印税とかで買うのです。NHK とかで稼がしていただきましたので，これは一応家計を圧迫していないという前提のもとでやっているわけです。いろんな古書店に声をかけていて，今も，イギリスからファックスがきたりして，一晩考えたりして買うということが結構あるのですが，この鹿島さんという人とはそういうところで通じるところがあって，最初，この本を見たときはなんて奴だと思ったのですよ。子どもより本が大事だというのですから。鹿島さんは，同時にフランス文化の紹介者であって，本だけで20冊くらい書いていて，いろんな分野にまたがっています。デパートを初めて作った夫婦の話だとか，新聞を初めて作った人の話だとか，そういうのを読むことで，広がっていく。ドイツだとドイツ語をやることでどんどん広がっていく。最近マレーシアに行ったり，シンガポールに行ったりしていますが，そうすると，そこのことについての本を読もうということになる。それだけだんだん世界が広がっていく。つまり言葉というのは，その文化に入って行く窓であるということをつくづく感じるわけです。

私がドイツ語を何でやったかというと，ドイツへ旅行して，その影響もあるのですが，昔からオランダ語に興味があったのです。何でオランダ語かというと，日本の近代用語というのが，オランダ語によって，江戸時代の蘭学者によって多くの言葉が作られている，あるいは蘭学者によっていろんな言葉が定着してきている。例えば，「病院」という言葉がありますが，この言葉は，実は中国でできた言葉なんです。中国へ17世紀にやってきたイエズス会の宣教師が作った本の中に「病院」というのが出てきます。病院が出てくる本が，日本に伝わってくる。こういう本は当時は禁書なんですね。見てはいけない本なんです。ですが，蘭学者たちは西洋に対するあこがれ，西洋に対する知識欲，これが旺盛ですから，こういう本を写して皆で読むんです。そして，この「病院」という言葉が蘭学者の手によって伝わっていく。

ところが，中国では，こういう本は読まれなくて，「医院」という言葉がずっとつづいてい

くのです。そして，この「病院」という言葉は，日本から中国へ一回もどりますが，結局中国では定着しなかった。だから日本人が作った言葉のように思われてしまうのですが，本当は宣教師たちが作った言葉なんです。

他にもたくさんオランダ学者が作った言葉があって，オランダ語とドイツ語は親戚関係みたいな言葉ですから，ドイツ語を勉強したらオランダ語も多少わかるかなあと思っていたわけです。ドイツ語を勉強して思ったことは，中国語とは全然異質だということです。我々は学校で英語を勉強しますが，英語というのは，中国語に近くなっているのです。英語を勉強して，西洋語を勉強したということにはならないだろうなあと思うくらい色んな変化をなくしてしまっている。She likes のとき s がつくとか，そういう所しか残っていない。それがドイツ語とか，西洋語の中ではそういう形の変化というのを残した言語がたくさんあって，例えば，形容詞だったら後ろに来る名詞が女性名詞なのか男性名詞なのかで変わってくる。これは面倒くさいといえば面倒くさいのですが，そこに非常に美しさを感じたのです。

中国語というのは何もないのです。一つ一つがぽつぽつつづくだけです。それとの比較でいくと，なんてつながった言語なんだろうかということで，本当に軽いショックを覚えたくらいです。だから，中国語の世界しか知らないものにとっては，西洋語の世界というのは英語だけでは駄目なんです。だいたい，外国語をやる場合は 3 つ目くらいから方法がはっきりわかってきます。英語をやったときは，意識していませんでした。中学の先生が，日本語との比較をしたかもしれないのですが，ほとんど記憶にありません。中国語は 2 つ目だったのですが，この時もそんなに方法を意識した覚えはありません。ドイツ語は 3 つ目だったのですが，ある程度やった段階で方法をすごく意識しました。英語だけではわからないのではないか。少なくとも大学に入ったら，英語以外にもう一つやらないと意味がないんじゃないかな。私の場合はドイツ語をやることで中国語との差というものを考えましたし，言語を勉強する時の方法というか，そういうものを非常に意識するようになってきました。

教える上でも，自分が勉強していますから，どんなふうに教えればいいのか，どんな教材を使えばいいのか，辞書はどう引けばいいのか，そういうことを考えざるを得なくなります。ある程度やってきますと，自分がやってきた過程というものを忘れている。学生に「こんなの一週間で覚えられないの」「この次までに覚えてきなさい」「覚えてない？」「なんで覚えてないの」とか言いますけれど，自分が新しい言語を勉強してみると，なかなか覚えられないんです。若い時には覚えられたのに，と思うのです。でも，年取ったら覚えられないということはないのです。覚えようとしている人は，何歳になっても覚えられるのです。多少衰えてくるとは思いますが，それは年だけのせいではない。外国語の場合はすぐには覚えられないのです。絶対にある時間がいるのです。忘れては覚え，忘れては覚えしながらやっていくので，天才肌の人というのは，こつを覚えているのです。ある程度やったら，今度は戻ってやるとか，こういうふうにすれば記憶の定着がしっかりするということがわかっている。

天才と凡人との違いはないんじゃないかという気がするのです。

私が外国語をやるというのは，先ほども言いましたが一つは外国へ行ってみたいという気があるからです。私は若い頃，ほとんど旅行したことはありませんでした。私の2歳違いの弟は結構旅行していて，貧乏でしたけれど，アルバイトをしては，旅行していて，よく私をからかうのです。時刻表は読めないだろうと。時刻表をどうやって見るかもわからない人間でしたから，旅行というのは縁のないものだと思っていたのです。

ところが，なぜ，海外に行くことになったのか。中国は，何回か行っていますし，82年から83年にかけては北京に1年半住んでいました。最初の子どもは北京で生まれたくらいです。でも，中国以外には行くことはまずないだろう，一生行くことはないだろうと思っていたのです。

でも，不思議なもので，89年でしたか，私の家内の友だちでスイス人と結婚しているのがいるんですが，そのスイス人というのが新聞記者で日本に取材にきた時に我が家に泊まったのです。そのとき「遊びにきませんか」と言われたのです。日本人だと，「ちょっと遊びにきませんか」と言うとお愛想ですよね。「引っ越しましたから，近くにおいでの節は是非お立ち寄りください」。これは，立ち寄ったら，きっと困ります。でも，私たちはすぐ信用して「すぐ行きます」というわけで，91年か92年に，行ってしまったのです。この時ちょうど彼らは日本に来る用事があってアパートが空いたので，そのアパートを借り，荷物を置いてスイス国内をまわって，それから，イタリアをまわって，スイスに一旦帰って今度はドイツをまわった。それが最初のヨーロッパ旅行です。1992年のことです，まだ10年たっていないんです。

その時は本当にスイスのチューリッヒに着いて，周りは皆外国人だと，非常に驚きを感じました。慣れてくるとそういう驚きはなくなるのですが，最初にそういう異国の地を踏んだときのショックは非常に大事なものだと思います。

それがきっかけになって，あとどんどん行くようになりました。最初にスイスとイタリアとドイツという，英語圏以外の世界に行ったのはよかったと思います。当時は英語圏には行きたくないという気持ちがあったのです。どうしてかというと，スイスとかドイツとかで英語を喋ると，これは彼らにとっても第2外国語だから，ハンディが少ない，まあいいじゃないかと思ったのです。私たちは，よく外国人と中国語で喋ることがあります。これは見ていると奇妙ですけれど，でも負けないぞという気があるんです，こういう時は。外国人とはお互いにハンディを持った言葉で喋るのがいいと思うんです。ところがイギリスとかアメリカへ行くと，ハンディがなくなるので，くやしいなあという気持ちがあって，行きたくないと思っていたのです。

最初にドイツに行った時には，ドイツ人は英語がうまいのですが，まあ一応外国語なのでハンディがある。ところがイタリア人は，最初に接した相手がそうだったからかもしれませんが，英語が下手なのです。かれらは非常に自信を持って話しますが，堂々と文法的な間違

いをします。だから，こっちもどんな言葉を喋っても通じるだろうと思った。そういう意味では，最初に英語を母語とする人たちの所でなかったことが非常に幸いしました。

帰国後，すぐドイツ語の勉強を始めました。そして，本当は93年にもドイツに行く予定だったのです。ところが，出かけようと，電源のコードを抜いた時に電話がかかってきました。どこからかというと，大阪の弟のところにあずかってもらっていた父親が，その頃84歳だったのですが倒れた，病院に入ったという。仕方がないから，その荷物を持ってそのまま病院へ直行したことがあって，行けなかったのです。葬式をすませた後，我々は大阪あたりをさまよって，公共の施設の何か座敷牢みたいな所に親子で泊まって帰ってきまして，非常にみじめな思いをしたことがあります。

その次の94年も行けなかった。上の娘に好きな男の子がいて，その子が試合に出る，それを見たいというのでやめてしまった。次に行ったのは95年です。この時はドイツ語をかなりやっていましたから，ドイツ語だけでずっと通しました。おそらく私のドイツ語力が最高度に達した時で，ノイシュバンシュタインというお城まで行きました。だいたい我々はヨーロッパへ行くと，前もって予約とかはほとんどしません。ヨーロッパというのはそこが楽なんです。

中国は，そこが大変です。中国を個人旅行するというのは至難の技で，今はだいぶん良くなったと思いますが，本当に疲れるんです。切符をとるのも大変だし，1日1回くらい喧嘩しないといけない。ヨーロッパは快適でした。中国語で輿水優さんという非常に有名な先生がおられますが，その先生も在外研究でヨーロッパをまわられたんです。それで，学会のときに，「お互い大きな声では言えませんけれど，中国よりヨーロッパは楽ですね」「本当に，本当に」とこっそり言い合ったことがあるのです。

ヨーロッパは，あちこちにインフォメーションというのがありますから，そこで，これこれの宿，お金はこれこれだ，シャワーはいるかとか，自分の要求にあった所を探してもらうことができますから，非常に旅行が楽なのです。ノイシュバンシュタインに行った時も，インフォメーションに行こうと思ったのですが，そこはもう閉まっていたのです。しまったと思ったのですが，ガイドブックに電話番号が書いてあったので電話しました。その時はドイツ語でやったんです。これが一番すばらしかったなあと今でも思っています。そこは眺めがいいのかとか，2泊したらまけてくれるのかとか，そんなことを全部出して，タクシーでどれくらいかかるのかとか，いろんな交渉をして2日目を安くしてもらうところまでやりました。そこは本当に眺めの素晴らしいところで，それに泊まり客は我々しかおらず，とても静かでした。

ドイツ旅行から帰ったあとの6月に3級を受けました。語学をやっていて，ダレかかる，そういう時に，思いきって中国へ行ってみるのです。あるいはどこかの国に行ってみる。そうすると，はずみがついてアップするのです。

検定試験もそうで，ダレかかったときに試験を受けてみる。そこで自分に鞭を当てるので

す。そういうことをすると，少し力が上がったなあという感じがする。外国語の学習というのはどこかではずみをつけないといけない，と思うのです。

96年に英語圏としては初めてハワイに行ってしまった。ただ，ハワイは日本語が通じるだろうと思って行ったら，案外通じないんです。日本語が通じるのは，むしろグアムですね。グアムは通じましたけれど，ここはむし暑くて2回は行きたくない気がしました。しかし，日本人がたくさん行くと絶対日本語は広まりますね。だから，たくさんの人が旅行するといいですね。そうすると，日本語は世界に広まっていく。ヨーロッパの人は，避暑に行きますよね。あれは何で行けるのかというと，言葉の上での障害がない，たとえばドイツ人ならドイツ語がわかる人たちがいろんな所にいるんです。日本人もみんなが旅行して，日本語が通じる所というのをたくさん作れば，日本語もそれに連れて広がるのではないかと思います。

96年に初めてイギリスに行きました。子どもがエクセターという，西海岸のロンドンからコーチ（長距離バス）で4時間かかるところにホームステイに行ったのを機会にむかえがてらロンドンに行きました。すると下の子どもも行くと言い出しまして，結局，娘2人と私と3人でロンドン生活を2週間くらいしたんですが，この時に，さっき紹介がありました『近代日中学術用語の形成と伝播』(白帝社)という本の資料を大英図書館でいろいろ集めました。

その2週間で，ロンドンはとても気にいってしまったのです。私は一応英語は旅行会話くらいはできると思っているのですが，いいかげんな所があって，イギリスというのは入る時に結構うるさいのです。今の中学の教科書ですと，What is the purpose of your visit? 何で来たのか，そういう質問がテキストに出ています。この前のときは，係官が How long? と言ったのを，Hello! と聞いてしまった。それで，Hello! と言ったら，子どもが，あれは How long? だよと言うんです。子どものほうがわかっていた。それから What do you do? というのは職業を聞く質問ですよね。ところがなんて答えたかというと，Sightseeing. と答えたのです。係官は呆れて入れてくれましたけど。

98年にはロンドンからパリを経て，ドイツのゲッティンゲン大学という所で中国近現代用語プロジェクトとのミーティングに参加しました。これはフォルクスワーゲンの基金でやってて，今年も12月にあるので来いと言われていますが，12月のドイツというのは暗くて寒そうでいやだなあと思って，ちょっとためらっているところです。

その時開かれたシンポジウムに中国人の人がいました。中国人というのは，ヨーロッパへ行くと少しヨーロッパ化します。中国人的な面ももちろん持っていますが，中国人的な荒々しさというものがなくなって，洗練されてくる。

このゲッティンゲンでは，私とあと日本から3人参加しまして，そのうちの一人は関西大の先生で沈国威という中国人ですが，この先生は，ちょうど1カ月前中国に学生を短期研修に連れて行っていて，日本に帰ってすぐその足でドイツにやって来たのです。その先生を見てびっくりしたのですが，日本にいる時と態度というかふるまいが違うのです。何かとても

中国人ぽいんです。中国に1カ月行ってくると変わってしまっているのです。中国の人は日本に来ていると日本ぽくなっている。日本で教えていた中国人の先生が中国に帰る。中国で会ったとすると，日本と全然違う印象を受ける人がいると思うんです。それと同時に，我々も日本の文化の影響から逃れられない所があるんだなあということをいつも感じます。

そういう意味で，外国にいる中国人が何を考えるのかは，私が今後とりくみたいテーマの一つです。日本にきた中国人が，日本でどう変わるのか，あるいはどう影響を受けるのか。これは日本人が中国へ行った場合も同じだと思いますが，我々は案外このへんを分析してないような感じがするんです。日本人は中国へ行って変わるのか変わらないのか。私は中国へ行って暮らしているときも，これは1982年ですけれど，絶対に人民服というのを着なかった。ただ中国人だと安いところがあるのです。今は統一化されましたけれど，昔は中国人と日本人で料金が違う所がたくさんあった。そういう時は中国人になりすまします。5分くらいはだませますからね。

他の世界を知るということが，自分にとって中国人がどうそこで変化するのか，日本人がどう変化するのか。こういうものを考えさせる一つのチャンスになった気がします。

外国語ができるというのは，レベルがいろいろあるんです。通訳までできるとか，読み書き話す全部できるというそういうレベルなのか，読めればいいとか，旅行会話ができればいいとか，目標によって変わってきます。自分の中での目標の設定というのはその都度変えないといけないと思うんです。読み書き話す全部そろって何カ国語もというのは，これは千野栄一さんの『外国語上達法』という本に書いてありますが，数カ国語のレベルを維持しようと思っても，これは不断に復習をしなければいけない。不断に勉強しなければいけない。そうすると，一日に何時間も外国語学習に取られますから，これでは外国語の奴隷になる。だから，自分にとってそれがどういう位置なのかということに応じて，でき方というのが違うと思うし，それでいいのだろうと思います。

学生が私の研究室に入って来て最初に言う言葉は，だいたい決まっています。「先生，この本，全部読んだんですか」。私の恩師の一人が，私の後輩の結婚式であいさつをしたときに，奥さんに向かってこう言ったんです。結婚して言ってはいけないことが2つある。研究者の妻として。一つ目は「あなた，また本を買うんですか」。2つ目が「これ，全部読んだの？」。これは禁句なんです。本が好きで，今すぐ読める以上の本を買う人は，何で買うのかということはわかっています。全部すぐ読むためじゃない。いつか読むためなんです。全部すぐ読める時間はないし，本ばかり読んでいると，思考が停止することがあります。人間というのは時々本を置いて考えないといけない。そういうときは本を放さないといけないのです。いつもいつも本を読んではいけない。

私がやっている勉強方法は二つです。一つは，ラジオだとそのテキストの本文を暗記するんです。何回も読んで。そして，毎月のテキストを破ってそこを閉じます。そして，一方で

本文だけのテープを作るのです。本文だけを抜き出して，編集し直して，それを繰り返し読んで，繰り返し聞く。こういう，ある場を持った会話をたくさん頭に入れるというのが一つ。これは今までのフランス語講座だと，もう4期5期やってきていますが，全部作ってある。これによって，場面のある会話を覚えます。

もう一つはドリルをたくさんやる。これは検定なんかの問題集とかをたくさんやるといいと思います。この時に語彙をたくさん増やさないといけないのです。語彙というのは，私も今まで10種類くらい中国語のテキストを作ってきましたが，テキストの中だけでは基本的な語彙も全部は出せない。だから，語彙は自分で補わないといけない。その時にわりと便利なのは，分野別，意味分野別に，例えば，家具とか，果物とか，野菜とか，に並べたものを使うといいと思います。

昔，私たちの大学受験の時に赤尾の豆単というのがあって，ABC順に出ていて，覚えたら食べるという人もいましたね。これは絶対駄目なんです。ABあたりで止まってしまう。森一郎という人が，『試験によく出る英単語』という革命的な本を書きました。今でも持ってますよ。二百何十何刷かなあ。これは試験によく出る順に出す。これはある意味ですごいと思う。

ということで，語彙の勉強は，まず分野別。しかし，まだそんな本はでてきてないと思うのです。分野別に，その中から重要なものから覚える。動詞だったら例えば手の動きとか足の動きとかありますよね。自分の覚えてないところをなだらかにしていく。そういうことがいるんじゃないかと思います。

発音は，中国語の場合には，最初は特に先生についたほうがいいと思います。フランス語とドイツ語は発音の段階であまり直されなくて，なんとなく我流でやっているところがありますが，中国語はやはり発音は先生につかないと駄目だと思います。最初にへんな発音を覚えるとなかなか直せない。中国人の先生に習ったらいいかというと，そうでもない。むしろ最初に中国人に習うのはあまりよくないと思います。中国人が可とするのと，日本人が可とするのは違っていて，通じるけれどもきたない中国語になる可能性があると思うんです。

今，愛知大学の現代中国学部が，半年たった学生を中国に送っていますが，出てくる問題の一つは，日本人と中国人のどちらが学生の中国語の指導力を握るのかということで，半年ぐらいで向こうに預けると向こうの色に染まりやすくなってしまう。こちらでかなりできてから，それをブラッシュアップするのではなくて，向こうで発音も後退してしまう。中国人に習うとやはりちょっと違いがでてきます。私からみれば，どうしても発音がきたないし，悪い場合が多い。いい場合ももちろんあるんですが。それから，文法がめちゃくちゃになる。これは日本での基礎をつけてないから，よくわからないけれど通じるということで安心してしまう。ですから最初は日本人にしっかり習ったほうがいいんじゃないかと思います。

語学というのはどうもおたくを作るといいますか，私はよく電車の中なんかで，すぐにテキストを出して読みます。家から学校まで4分ですけれどその間でも読む。電車を待ってい

る時にも読む。ただ家族と一緒のときはやらないほうがいい。家族の和を崩すことになる。昔はそういう時でもやっていたが，これはよくない。私自身に言えるのですけれど，何か人間というのは外の世界に広がるのと同時に，自分の中にも広がっていかなければいけない。自分の中にも掘り下げていかなければいけない。そういうことが語学ばかりやっているとできるのかなあという気が多少あることはあるんです。語学の勉強というのは，その点でマイナスになりはしないかということも最近はちょっと気になっています。

千種　私よりも上の方がみえているのでこれは困ったなあと，プレッシャーですね。でも，まあ仕方ありません。題に沿ってお話ししたいと思います。したいと思うというのは，実は自信がないのです。というのは，私は何か話し出しますとどんどん脱線するのですね。頭の中ではちゃんと用意してあるのです。それをお話ししなければいけないと思っていながら，1時間2時間たって終わってみて，「あ，しまった。言ってないことがある」ということが多いものですから，今日はしょうがないから，危ないから，先にポイントだけ言ってしまいます。

何かというと，「外国語への招待」ですから，こういうふうにしたらたぶん外国語に馴染みやすいのではないかということを，私なりに体験したところから，まず言ってみること。ただ，あくまでも私だけの体験ですから，私というのは，実は普通じゃないのです。イタリア語で「ピーグロ，ピーグロ，ピグリッシモ」ちょっとおもしろい呪文のような言葉ですね。ここは何でもいいので，変えてしまえば「ピアーノ，ピアーノ，ピアニシモ」音楽の時間の言葉ですね。「弱く，弱く，うんと弱く」逆に，「フォルテ，フォルテ，フォルティッシモ」「強く，強く，うんと強く」「ピーグロ，ピーグロ，ピグリッシモ」は「なまけ，なまけの大なまけ」本当に私は，幼い頃からずっとこうでしたね。そういう人間が引き出した結論ですから，意に沿わない点も，意に沿わないとお思いになる方もあると思いますが，我慢して聞いて下さい。

一つは，覚えない。単語帳を持つとか，カードを作るとか，一生懸命覚えますよね。あれ，やりません。わからない単語が出てきたら，辞書を引けばいいのです。辞書にちゃんと出ていますから。貧弱な頭で覚えようったって駄目です。しばらく読んでいて，同じ単語が出てきて，わからない，また，引けばいいのです。そういうのを，50回もやってごらんなさい。もう，引かなくったって，「あ，ピーグロというのは，なまけ者だ」と。私はその要領でいきました。きちんと覚える，暗唱するというのも，若い人しかできませんね。私はもうできません。若い頃だったら，例えば，天皇の名前がずっと30代まで言えるのですけれど，もうできません。この調子ですからなまけなまけの大なまけでいきます。

単語は，覚えなくてよろしい。そのかわり，辞書は徹底的に使います。だから，辞書とおつきあいをする。英語では「辞書と相談する」といいますけれど，私は，「辞書と遊ぶ」，「辞書とたわむれる」もっと下品な言い方をすると，「辞書に淫する」，というような気持ちです

ね。覚える必要がない代わりに，徹底的に辞書をつぶしていくということですね。何冊も何冊もぼろぼろになって駄目になるまで使うということ。それがいやなら覚えるしかないでしょう。同じ要領です。

荒川先生が，どうやってイタリア語を独学したんだとおっしゃいましたが，今言ってしまいますと，私が独学した頃は，イタリア語の入門書というのはなかったですね，ほとんど。『イタリア語4週間』というのがありまして，それがあるだけで何もありません。辞書もほとんどないも同然でしてね。大学書院からこんなちっぽけな本が出ていただけですね。何もない。今は驚くほどあります。

今の時点に立って申し上げますと，何でもいいですから，本のタイトルでもいいし，著者の名前でもいいし，出版社の歴史でもいいし，自分が本屋さんに行ってぱっと手を触れた本でもいいですよ，何でもいいからイタリア語に限定します。イタリア語の本だったら何でもいいから取ってそれで読むのです。辞書を引く程度に丁寧に丁寧に読みます。ずっと読んでいく。終わりまで行ってしまったらそれはポイ。それをもう1回やろうというような殊勝なことはありません。もうそれは，1回目を通せばいいので。2度目。今度は，別の本。まただいたい同じようなことが，少し角度を変えて，あるいは表現を変えて，あるいは例文を変えていろいろ出ている。それをまた初歩にかえってずっと読んでいくのです。丁寧に丁寧に読んでいくのです。それが終わったらまたやめる。そして，次へ行く。3冊目くらいから，あれ，前読んだなあ，これ知っているぞ，これは知っていることだけれども表現が違うなあ，あるいは引用した例文が違うなあ，というようなことがわかってくる。それを終わったらまた4冊目にいく。それをまた最初からずっと読んでいく。

そうすると，4冊目くらいから，かなり予備知識というか，蓄積されていますから，それで，その本に対する批判が生意気にも湧いてきます。なんだこれ，下手だなあと。これは変だ。1番最初の時のほうがよかった。2番目のほうがもうちょっといいかなあ。3番目は駄目だ。いろんなことを自分が勝手に採点をするのです。そして，読んでいく。そういうふうにして続けていきますと，いつの間にか気がつくと，10冊くらいやるのでしょうかね。そうやっていくと，何かいつか身についていますね。同じことは動詞の変化についても言えるし，あえて覚えようとしないですね。ああこういうものかと見ていって，それで卒業して，また最初からもう1回初歩から。何度も何度も初歩からやるのです。初歩のレベルがだんだん上がっていくのですね，気がついたら。そういう姿勢から，何度も新しい本に挑戦する。それで10冊くらいいったら，もう1回1番最初に読んだ本に戻ってもいいでしょう。懐かしいし，読んでいると，今度は意外な発見がある。最初は悪口を言ったのだけれど，「いや，これは随分味がある本だなあ」というようなことは，つくづくあると思います。というようなことですね。ごくごく自然にその言葉に親しんでいく一つの方法ではないかと。さっき申しましたように，きちっと勉強する方法もありますけれど，この方法もあるということです。

それから，もう一つ，映画があるのです。映画を見ることがいいんじゃないか。最初のうちは，字幕スーパーで日本語が出てて，むこうでどんどん外国語が出ています。それを聞き比べてそれが勉強になるんじゃないかと思っていました。

ある時，「羊たちの沈黙」という映画，大変怖い映画ですけれど，これが吹き替えだけの放映でした。それを見ていたら何か足りないのです。なぜかというと，ジョディ・フォスターという女優さんの妙な英語。あれは標準点でいったらBかCくらいのようなすごい発音でね。何か鼻にかかった異様な英語です。それが非常にセクシーで面白い。これが聞こえないというのが非常に寂しくて，これは駄目だというので，途中から日本語吹き替えじゃなくて，英語の方へ変えちゃったのです。そしたら，今度はわからないのです。英語ばっかりだと。英語もある程度できるつもりなんですけれど，アンソニー・ホプキンスがすごい役どころで，怪物ですね。そっちは本当はわからないはずなのにまだわかる。ジョディ・フォスターがわからないので，これはいけないと一念発起して何度も何度も日本語でもって聞きました。それから，ストーリーを把握して，ポイントではこれこれこういう台詞を言うなということが頭に入って，今度は英語だけでずっと聞いていた。このジョディ・フォスターの不思議な美しい異様な発音ですけれど，それが何とも言えないですね。うっとりしながらその世界にひたることができたのです。映画も非常に利用できますね，そういう意味で。

締めくくりとして，完全を目指しても駄目だということです。外国語の勉強をして，母国語で話す人と同じくらいいけたらすごいなあ，完璧だと思うのですが，それは絶対できないということを映画で教わりました。これは，サスペンス映画で，IRA，アイルランド共和国軍，テロリストグループの親方というのがバーにいまして，IRAのメンバーだと称する男が入って来る。確かにアイルランドの方言で喋っている。ところが，そのボスは，微妙な発音が違うと言う。その恐ろしさですね。言葉の持っている恐ろしさ。その土地土地にしかない，独特のほんの微妙なイントネーションとかがあるわけです。それが，部外者にはわからない。イングランドの人にもわからないでしょう。ましてや，我々日本人にはわかるわけはないので，完璧な外国語のマスターは駄目だなと思いました。

ただ，例外というものもありまして，日本の小説をイタリア語に翻訳するというイタリア文学者で須賀敦子さんという方がみえまして，この方には，よくお会いしていましたけれど，ある時非常に驚きましてね。彼女の家に行った時に，同じくイタリア文学をやっている米川良夫という先生がいまして，それから，もう一人白崎容子という，今NHKのラジオでイタリア語をやっている人と3人で須賀さんちへ行ったのです。そしたら，そこへ電話がかかってきて，そしたら何かイタリア語なんですけれど，私は全然わからないのです。変だなあと思って聞いていたら，米川先生が，「あれは，なんとかの方言だよ」とね。びっくりしましたね。こんな微妙な土地土地の方言まで，上手に使い分けるという人。これは須賀さんが「語学の天才だ」というのではなくて，この人は長い間イタリアで育って，そして，旦那様がイ

タリア人であったというようなことでしょう。「須賀さんはすごい人だ」とその時はみじめに思いましたが，これは絶対まねできないし，まねをしてやるものかという気持ちがありました。なぜ，まねをしてやるものかと決意したかというと，須賀さんはイタリア仕込みです。つまり，自動車の運転たるやすさまじいのです。一度お宅まで乗せてもらってもう仰天しましてね。途中で何度降ろしてもらおうかと。もうその人のまねはしてはいけないと，私は自分に言い聞かせておりました。閑話休題。あとはのんびりとレジュメにあります通りお話しします。

まず最初に「独学のすすめ」と書いてあります。読みますと，「わたくしの場合，義務教育の中学英語から始まり，“専攻”した外語大のロシア語，趣味で始めたイタリア語にいたるまで，現在かかわっている外国語はすべて独学でした」次に変なことが書いてあります。「戦争直後，英語が得意でアルバイトを頼まれたり，云々」これは余計なことなんですが，語学の効用というのがありますね。「外国語への招待」ですから何かメリットがなくてはしょうがないだろうと思って，効用を探したわけです。私の場合，あまり効用はないのですが，これは確かに効用でした。この「独学のすすめ」から入っていきます。

変に思われますね，義務教育の中学英語が独学だと。これは時代を写しています。外国語の学習というものは，時代と切り離せないという一つの生きた証人でしょうかね。私どもの世代は，昭和5年，1930年の生まれですから，当年取って68歳。もうじき69歳ですけれども，これはもう宿命的なものでして，中学英語は1年の時はよかったのです。もちろん日米戦争は始まっていますよ。私が中学で与えられたテキストはクラウンリーダーといいましてね。固い表紙でぎんぎらぎんの見事な非常にクラシックなすばらしい造本でして，すごい世界が目の前にあるんだなあと，どきどきしました。1年たつ頃から，「英語は敵性語だ」ということで英語の先生が冷遇され始めて，先生がいつのまにか戦闘帽を被って鞭をもって部屋を歩くようになって，ときどきは，スリッパで生徒の頭を叩くということが平然と行われるようになりました。もうこれは脅威でしてね。2年になりましたら，現在完了が始まりまして，Spring has come. そこに出ている挿絵は何かというと，兵隊さんが出ていましてね。もうこれは駄目だなとしみじみ感じました。授業もだんだんおざなりになるし，教練やいろいろな動員をかけられましてね。軍需工場のお手伝いだとか，防空壕を掘りなさいということで，大抵それを英語の時間にやるのです。英語はほとんど学校では教わらないようになりました。

私の家の斜め前に，ガントレッドさんの家があり，年配の方はご存じだと思うのですが，日本キリスト教矯風会のガントレッド恒子さんという方がいまして，その人の旦那さんが，今の一橋，当時の東京商科大学の英語の先生です。そこはどういうわけか教会でもないのに日曜学校をやっていまして，私はそこに通っていました。何か英語の雰囲気がありましてね。そのお隣に外務省勤務のお役人がみえまして，私の家の裏になんと警視庁外事課の方が引っ越してみえまして，どうも私が思うに，ガントレッドさんを見張りに来たんじゃないかなと

思いました。ある時新聞にスパイ容疑のことも出まして，ガントレットというカタカナの名前がいつのまにか，岸登になった。なんかあくどいような，でも警視庁外事課のお役人の所に，1年の時に勉強に行かされました。そんなこともあって，なにか英語の雰囲気というものは捨て難いのです。学校ではできないのですから。警視庁外事課のかたもお忙しいでしょうからそうそうはお邪魔もできないし。

ある日夜店で，独特の照明のにおいがしますね，あの中の古本が置いてあるところで見つけたのが，小さな黒い本です。それは英語の入門か英会話入門という本で，10年くらい前の本のようでした。はっきりは覚えていませんでしたが，それは黒い皮のような表紙でしてね，子ども心にこんな立派な本が今時はないなあと思いまして，それは非常に安くて，買って帰りました。英語にカタカナがふってありまして，こんにちわ，はじめましてからずっと，戦時色が全くないのです。戦争になる前に作られたものらしくて，ものすごい夢がありましてね。きれいな写真が出ている。カタカナが打ってあるのは英語の勉強によくないということで，読んではいけないとされていましたが，かまわないから，私はそれにずっと親しんでおりました。学校のほうの英語の足りない分は，たぶん一人でやってたんでしょう。そういう意味で，英語は独学です。

そして，戦争が激しくなって3月9日の大空襲というのを目撃しましてね。それは恐ろしくて，早く逃げなくちゃと，親父は伊勢，松阪出身の松阪商人ですから，伊勢の松阪に疎開したのです。当時津中学といっていました津中へ転校して，それで津中へ通っていました。3年生のときに戦争が終わりまして，そうしたら，それまであんなにまで忌み嫌われていた英語というものが，息を吹き替えしたというか，すごい勢いになってきましてね。英語の先生は，もう学校では校長をしのぐぐらいの勢いになってきたのです。そして，学生の中では，私は，皆さん勉強してない中で，一人勉強してましたから英語ができるのです。それで，進駐軍が入ってきていろんな書類を出す。それを書くだけですから中学生でもできるのですが，皆さん何かひるんでしまって，私にはそれは軽い作業なので，そういうのをやって生まれて初めて，アルバイトというお金を貰いました。何を買ったか，覚えていません。ついには学級委員なんかにさせられましてね。英語しかできないのですが，生物は例外です。英語の先生は戦闘帽を被って学生を殴っていたのですが，生物の先生一人は「学校は軍隊じゃない」と生徒たちの前ではっきり言いましてね。それがどの程度しみこんだかはわからないけれど，少なくとも私は，この先生いいなあと実感しまして，生物だけは一生懸命勉強しました。物理や数学は駄目でした。英語しかできないのが，学級委員になってごらんなさい。学級委員というのは，黒板に行事予定とかいろいろ書かされるのです。間違った字ばかり書くし，これは大変なことだ，早く逃げなくちゃと思っているうちに，疎開がとけて東京へ逃げていって，大任は果たしたのです。

次に，専攻した外語大のロシア語。ではなぜロシア語をやったか。英語は，あんなにも弾

圧され，のけものにされていたのに，戦後になってがらっと変わってしまいましたね。15歳の少年が，昨日まで正しいと思っていたことががらっと変わってご覧なさい。どんなショックを受けますか。大江さんも書いていますが，あの人はまだ若いですからね。5つくらい。だから，まだちょっと足りない。もう，そのショックたるや大変なものでして，これで外国語をやる段になって，「英語はもういいわい」ということがありましてね。あんなに駄目だといわれていた英語がよくなった。今何が駄目かなあと探したら，荒川先生は中国語とおっしゃったけれども，ロシア語があったのです。

ロシアは天敵のようなところがあってね。それがひょっとしたら先にいって変わるかなあという打算ですね，そういう年頃になったのです。だけど，もっと純粋な意味もあるのです。というのは，いろんな経緯もあるのですが，その経緯は省いておいて，私は，なぜかトルストイをずっと読んでいましてね。戦争が終わった中学4年くらいかな。中学4年，5年とトルストイの中にひたりこんでいましてね。これはいろんな点から，できることならそれを原書で読みたいという気持ちにかられまして，当時，親への説得なんか，不可能ですよ。ロシア語なんて共産党だから，赤だから，「そんなもん駄目だ」ということで，親族会議まで開かれてしまいまして，絶対駄目だということになったのです。

私は，幼い知恵を一生懸命出して，「英語だって迫害されてこれこれこの調子。ロシア語も将来いずれ日の目を見ることもあろう」という方術を使いまして，何とか許可を得て外語大に入ったのです。そこで後に関わることなんですが，当時は外事専門学校といういい方をしていましてね，ロシア語科に入ったのです。何か，自然に，外事専門学校，今の東京外国語大学に入れば，自然にロシア語が身につくのではないかと感じていたのです。自分で努力するくらいは常識ですけれど，自然にロシア語科に籍を置いたということは，即ロシア語をマスターすることではないかと，こういうような意識があって入ったのです。だから，ロシア語の文字の予備知識もなにもない。もちろん参考書なんかありません。テキストは，大正時代に使われていた『ロシア語改訂』という本が一つと，かろうじてロシア語辞典が一冊だけありましてね。それだけです。

そして，学校に入って60人の定員です。それが2クラスということで，30人，30人。びっくり仰天したのです。最初の時間にロシア人が入ってきたのです。そしたら，30人のうち20数人が皆ロシア語で喋っているのです。どんどん喋っている。なぜかというと，当時シベリアに抑留されていた人たちが帰ってきて，あるいは軍人としてシベリアにいた人たちが帰ってきて，あの人たちは優先的に国立の学校に入れるのです。そして，そういう人たちがどんどん入って来る。だから，現役の中学生から行ったのは，ほんの3，4人です。あとは皆そういうベテランです。なんとむこうの収容所でロシア語の通訳をやっていたという人がぞろっといましてね。そういう人たちと一緒に，なんでできますか。私はもう，その場でだめだと思いましたね。

中に一人偉いのがいて，これは親父さんが偉いのですけれど，原卓也というのがいて，後で東京外語大の学長になるのですが，試験受ける時も受験番号は隣同士だったし，同じクラスで，今だに付きあっているんですけれども，これは勉強してましてね。なぜかというと，やむにやまれぬ必要があったのです。そのことは後でふれますけれど，なんせ原久一郎というとんでもない人がお父さん。ロシア文学の。何を隠そう私がトルストイを読んだのは，もっぱら原久一郎氏の訳なんです。そして，トルストイの作品は全部原久一郎訳で読んでいるのです。その息子ですから，ロシア語をやらないことにはしょうがない。彼はしょうがないから勉強した。他の者は結局，中学から入った連中は皆，脱落しましたね。

私も学校に行ったってロシア語を聞くだけでぞっとします。見るのも聞くのも嫌だから行かない。そういうことのくりかえしだったのですが，第2外国語があるのです。何をとろうかと思いついたのが，このレジュメのあとのところになります。「難しい他力本願」とありますね。「トルストイの好きな comme il faut」これはフランス語。これはトルストイの『幼年時代』『少年時代』『青年時代』の三部作を読んでいきますと，これはもう原先生も訳しようがないと思うのです。comme il faut で出している。comme il faut は人間にとって理想の語ではないかと思われるほどに書かれているのです。けれども，単純にこれが何なのかわからない。知ろうと思ったらフランス語を知るしかないと知った。

それと，『戦争と平和』の冒頭部分，日本語訳ではきちんと日本語になっていますよ。しかし，ある時，原書を開いてみた。そうしたら，はなから馴染みのアルファベットが並んでいるのです。ずっと英語と同じアルファベットが並んでいまして，これがフランス語だったのです。何とまあ，4ページくらいに渡ってほとんどフランス語でして，間にちょちょっとロシア語が入っているくらい。これは第2外国語はフランス語でいってやろうと思いましてね。アルファベットもそんなへんちくりんなものではないですから入りやすいし，独学は一生懸命したという記憶はないのですが，その時，フランス語に詳しい方はご存じだと思うのですが，新里先生という方がおみえになりまして，その方が第2外国語を担当しておられまして，私はロシア語に向けるエネルギーを全部フランス語に向けておりました。

だから，わりとできたのです。できたのですけれど，決め手はそこに書いているのですけれど，ある時新里先生が，「川岸君は南仏に行かれたことがありますか」と聞かれてびっくりしましてね。「そんなに自分のフランス語は，すごいんだ」これですごい自信をつけてきたのですが，あとでいろいろ聞いてみると，パリの町はずれのすごい方言だというのです。それに近かったのです。考えてよくわからないのですが，その頃，シャンソン歌手の，イヴ・モンタンの「枯葉」が流行っておりましてね。彼の「枯葉」は空で覚えるように，イブ・モンタンの発音そっくりに覚えたのです。そして，フランス語の授業であてられると，その調子で読んでいたのです。考えてみると，イブ・モンタンは南フランスでしょ。南仏でイタリアの血が入っているとか，入ってないとかということがあるらしいのですね。荒川先生もイタ

リア人の英語というのは，すさまじいとおっしゃったんですけれど，だいたいそうじゃないか。語弊があるかもしれませんが。

一つ，余計なこと。トリノの町を歩いていたのです。トリノというのは例のフィアットの工場がある所で。会社の引けどきで，フィアットの工場の女性の従業員，もっと別の言葉を使いたいのですが，差別用語でいけないといいますから，女性の従業員が大勢来るのです。その中に，私を見るとフランス語で話しかける人が何人かいるのです。つまり彼女らにとっては，外国語というのはフランス語なんです。英語というのは，蛮族の言葉みたいな感覚があるらしいのです。フランス語でなくては駄目なんです。フランス語心酔説ということです。

トリノで聞いた限りは，お嬢さんたちのフランス語はきれいでしたよ。私は，たまたまナポリ，ポンペイをぐるっとまわったときに，観光バスの中で，スペイン人とドイツ人のグループに入れられましてね。その中で聞いていたら，ドイツ人の女の子のドイツ語というのはきれいだなあと思いました。

ロシア語はやめて，フランス語をやったわけです。だけど，卒業しなくてはいけないので，これはもう時効だからいいでしょう。卒業試験の時は，堂々とカンニングさせていただきました。なんとか卒業しました。

現実に，私は，3つの言葉をほとんど独学でやったということをまず言ったわけです。独学でやってきて，しかも，なんとか通用したということで，「独学のすすめ」としたわけです。だけど，これはちょっと語弊がありましてね。大学に籍を置くものが，学校で習うのではなくて，自分で勉強しろ，独学をしなさいというのは，問題があるんじゃないかと思うのですが。

それから，突然飛びますが，「イタリア語サロン」。突然出てくるのですが，脈絡はあるのです。というのは，私は，愛知大学に籍を置いていて，文学の方の講義をしております。外国語はやっておりません。それで，よく人に言われて，「愛大に行っているの？　あ，イタリア語を教えてんの」「いや，イタリア語を教えていない」「それ，もったいないなあ」と。それで，私はもう来年で定年ですから，もったいないなあ，できるだけやってみようかなあ，でも授業でもないのに，強制してやるわけにはいかないから，それで思いついたのが，独学ですね。独学で勉強している人が，何か行き詰まるとかわからないことがあって，聞いてみたい時があると思うのです。ちょうど私も行っていますから，ある日の，ある時間，愛大の中のある場所にいますから，そこへ自由にきて，わからないことがあったら聞いてください。もし，なければ，私が用意した簡単なテキスト，新聞の見出しだけなんですけれど，それを皆で読むようにしましょうというようなつもりで始めたんです。

ところが，集まらない。最初は毎回10人ずつくらい来るんだけれども，どんどん消えていって，のべ20〜30人くらいの人がいなくなったと思うのですが，どうも習いにきたらしいのです。習いにきて，それで教えてもらえないので，来てもしょうがない。独学ということには，

どうも馴染まないらしいのです。そう解釈しているのです。他に理由があるかもしれないけれども，独学ということには，どうも馴染まない。なんだ，だらしないと思ったのですけれども，考えてみましたら，先ほど申し上げましたように，私自身，外語大のロシア語科に入ればロシア語が絶対にものになると，完全に思い込んでいたわけですから，同じように，イタリア語サロンをのぞきにきた学生諸君も，おそらくはそのつもりでいらして，わりと先生が多いのでひるむんでしょうね。短大の学生さんが1人と，院生が2人と，教育職員5～6人ということで，なにかそれがメインでしてね。教職員といったって，教授の偉い先生ばっかりですからね。学生さんが来てびっくりしちゃうんですよね。そして，来ないのだけれども。私は，来年までいますから，それは続けるつもりです。

次に「他律的勉強」と書いてあります。「これはこれでも勉強」ですよということですね。「外語のロシア語を卒業した以上，鼎の軽重を問われるのはロシア語だと脅かされて……」

学校を出て，親がいろいろ心配して，いい所へ就職させてくれたんですけれど，どうも駄目なんです。やはり時間通りにハンコなんていうのは，もういやです。朝，満員電車の中で足を踏まれる度に，「もう来るもんか」と。それで，私の友人が，これもあまりできはよくなかったけれども，ちゃんと授業には出ていた男がいまして「おい，我々の鼎の軽重を問われるのは，ロシア語なんだぞ」と言いだして，この人，新聞社へ行っていたんです。「ロシア語を出たんなら，ロシア語ができるだろうということで，引っ張り出されるぞ。その時できなかったら，おまえの人生はおしまいだぞ」と脅かされたのです。

彼も一緒になって，3人でちまちまとロシア語の勉強を始めたのです。ABCから始めたんですが，3人男が集まると，衝突したりなんだかんだと結局，最終的に瓦解しましたけれど，その途中で外語のロシア人の先生の所へ殊勝にも習いにいったのです。その先生いわく「おまえら3人見たことがない」と。「そのロシア語は何だ。そんなの外語大を出ているわけはない」それで，「もうやめよう」先生のところに行くのはやめて，3人だけで勉強したのですが，結局，皆学校出て5年，6年とたてば，それぞれだんだん偉くなっていきますよね。勉強どころではなくなりました。

でも，私は，おかげでロシア語が身についたのだけれども，なんか不思議にロシア語で仕事をするようになりましてね。翻訳は面倒を見てくれた先輩がいるのです。その先輩は，科学評論家なんですけれど，ロシア語のフィクションだったらできるだろうと，それから始まりましてね。いつのまにかだんだん文学の方にも引きがきました。

それで，外遊とありますね。これは翻訳だけだったら到底食べていけない。そうしたら，商社のダミーというのがありまして，ソ連と通商する会社です。日本の商社はソ連や共産圏と通商，貿易はできないということになっていて，ダミーの商社を作って，それが貿易にあたるということで，そこへ来てくれといわれましてね。暇なら来てくれというので，翻訳やものを書いているときに，暇な時をみて行きましょうということで，シベリアに行く貨物船，

材木船に乗って，往復を何度もしました。すごくお金になりましてね。1回行ってくれば，半年は暮らせるくらいに入って，それで勉強していたんですが，シベリアに行ってびっくりしたのです。当時のシベリアは，今のロシアとは違いまして，絶対主義プラス全体主義でしてね。怖いこと，怖いこと。

貨物船がナホトカの港に泊まりますと，剣つき鉄砲を持った国境警備隊が来て，半ば犯罪者扱いです。それで，降りるとき身体検査をするやら，すごいし。私はうかつにもカメラを持って外に出て行ったのです。カメラは，国境警備隊は見逃したのですけれど，ナホトカの町へ入って行って，かわいい少女が遊んでいるものですから，それをスナップ写真に撮ったら，アパートの上から「バチェムー」，今だに忘れないですね。おばあさんが「何のためにそういうことをするのか」と怒鳴って，それからどどどどとロシア人が集まって，「おまえはスパイだ」とさんざんつるし上げられましてね。もう嫌になりましたね。こんな全体主義の国は嫌だ。もちろん軍国主義の日本も嫌でしょうがなかった私ですから，もう嫌だと思った。

冬のシベリア，大変な寒さですけれど，きれいなことはきれいです。真っ白な広い雪原がありましてね。いつもは怖い国境警備隊も，兵隊さんが「どうだ，美しいだろう，冬は。なにしろバクテリアだって寒さで死んじゃうんだから」と。すごい寒さなんです。ビール瓶をうっかり船の外に置いておいたら，すごい音がして破裂しちゃいましてね。たぶん凍って割れたんじゃないかと思うのですが，すごい寒さです。でも本当にきれいです。青空と白い雪原が延々と続きましてね。こんなきれいな自然で，本当に人間が自由に好きなことを考え，外国人が写真を撮ったのを，あんなにつるし上げなくてもいいような国はないかしら。こう探していた時に，たまたま船員向けのシーメンズクラブというロシアのお役所が作ったクラブがあるのですが，そこで「トスカ」ですね。オペラの映画をやっていましてね。それを見ていていいなあ，私はこれしかないと思って，イタリアのその世界に入っていきたいと思った。

ずっと後になって考えてみると，その思いを新たにしたのは，カプリ島に行った時でした。カプリ島で夏前でしたか。道路に光があたりましてね。なんか白くみえるのですね。全体にあのへんの家は白くて，屋根はだいだい色ですけれど，非常に白い雰囲気が強くて，空は真っ青でシベリアに通じるなあと思ったのです。だけど，イタリア人はあまりいませんけれどね。観光のカプリ島ですから。ドイツ人，スペイン人，アメリカ人ばっかりですけれど，自由で平和で……。

翻訳をするとかものを書くという作業は，一つの楽しみだけれど，どういう楽しみでしょうね。なにか意味があるかどうかわからないけれど，何か楽しみでね。優越というのでしょうかね。それに浸っていましてね。それはそのまま続けながら，イタリア語の勉強は始めました。

早くロシアから足を洗いたいという気持ちがあったのでしょうかね。一生懸命やっていましたね。書いてありますね。「シベリア通いで自由主義体制を渇望。その象徴的存在としてのイタリアへの憧憬。フランス語を学んでいたのが役に立ちました」そのとおりです。イタリ

ア語の文法の，条件法あたり，フランス語の知識さえあれば，すーっと通っちゃうのです。それで，冒頭で申し上げましたような方法で勉強しておりまして，これは本を読んでやろうということになりまして，何を読もうかと考えたのです。

津中で戦争直後になって，英語の勉強が盛んになって，津中出身で東大出たばっかりの英語の先生が赴任してきまして，その人いわく「君ら，英語をやろうと思ったら」次に出た言葉を私は覚えていないのです。ポルノと言ったのか，Hと言ったのか，とにかく，「そういう好色本を読め」好色本を読むにしくはなしと。ポルノという言葉は，当時はまだ一般的でない。Hという言葉は変ですものね。まあ，Hと言えば，そういう本を読むことを指すようなのですが，Hというのは，我々の記憶からすると，変態のHですからね。正常のセックスなどをHというのは，変なんですよね。たぶん好色本を読めと言ったのでしょうね。

それとのつながりも若干あるのですが，私はミステリーを読んでやろうと思って，イタリア語のミステリーはないかなあと思って，探し始めましてね。探したってあるはずはないのです。私が勉強したころは，さっきももうしあげましたように，大学書林の小さな辞書と，『イタリア語4週間』ですもの。それしかないし，どこにも籍を置いていませんでしたから。大学に籍を置いていたら，あるいは大学の図書館にあったでしょうけれども，一人ですからね。一人で独学ですから，何もない。何もないけれど，何か情報が欲しくて，手紙作戦です。イタリアの大新聞の学芸部あたりにしょっちゅう手紙を書いたのです。「私は，イタリア語を勉強してて，イタリア語でミステリーを読みたいのだけれども，どういう本がいいだろうか。教えてほしい」ということで，随分手紙を書きました。そうしたら，やっと一つ返事が戻ってきたのです。それは，コリエーレ・デラ・セーラというイタリア最大の新聞です。そこの学芸部の，エンリコ・エマヌエッリという人で，文通が始まりまして，次々と教えてくれるのです。私は，本の題名だけでいいのに，ファシズム時代に出た非常に面白いミステリーだとか，そういう本を送ってくれた。

ある時，手紙が来て「実は，自分は作家なんだ」というのです。今，百科事典でエンリコ・エマヌエッリを引くと，出てきますよ。現代イタリア文学の錚々たる人物です，そんな人とまあ，亡くなるまでずっと文通を重ねていましてね。そこで，私は，正規にイタリア文学の勉強はしてないけれども，自分ではエンリコ・エマヌエッリの愛弟子なんだと勝手にきめこんでいましてね。彼の教えてくれたとおりの読書傾向をずっとやってきました。これが「自発的勉強」ですね。

「他力本願」これはロシア語をやったときです。ロシア語を知っていないと鼎の軽重を問われると脅かされて，仕方なしに一生懸命やったということが「他力的」であって，そこから何としても逃れようと，自由が欲しくてやったのでしょうかね。それが，「自発的勉強」です。

次にかいてあります「特定の関心事と外国語」とありますが，これは何でもないことで，外国語を勉強しようとして勉強しても，本当にこれは無駄ではないということです。外国語

を勉強するんだったら，それは一つの重要な学問の対象ですからね。横にみえる高橋先生がそうです。高橋先生は，言語学者です。だから，言語学者ならば，外国語の勉強でいいと思うのですけれど，普通，素人が勉強をやるのはほとんど不可能です。だから，もし外国語を一生懸命勉強しようと思うのだったら，何か自分のテーマを持って，自分の好きなテーマ，趣味でも仕事でも何でもいいですから，そういうテーマを見つけて，それが非常によく書かれているような国の言葉，それを，自分の目標とすることを何かものにするために勉強するという，方便としての外国語でしょうかね。それがいいのではないかと。

それから，最後に「人の行く裏に道あり花の山」というのがありますが，これは相場の言葉なんですね。株や商品相場なんかで皆がいいというのは面白くない。ダウ平均が上がったからいいというんじゃなくて，裏をかいていく。そこに大きな収穫があるよという有名な言葉ですけれども，考えてみたら，私にとってのロシア語は，全く「人の行く裏に道あり」ということで，イタリア語もそうです。今は本当にイタリア語も，講座もあれば，本もありますが，当時は何もなかったですからね。「人の行く裏に道あり」このことです。

「ほかに」とありますが，これは全くよけいなことです。スウェーデン語，ポルトガル語，スペイン語とありますが，スウェーデン語については，朝日新聞の夕刊の隅っこにスウェーデン語講座が，どこどこの5階で始まるよとありましてね，スウェーデンといえば，中立の国のようだし，それから先進国だし，インテリアが非常に面白いなあと。土曜日の夕方という時刻もよかったからでしょうかね。行ったら，そこで外務省のOBの人がスウェーデン語を教えていまして，生徒さん少なかったですね。6～7人でしたね。その中に一人何かよく聞いた声の人がいるのですよ。村岡花子さんです。村岡花子さんは，当時ラジオで童話を読んでみえたでしょうか。そういう機会でもなければ，聞くことはなかったと思いますけれど，村岡さんがいなかったら続かなかったですね。

それから，ポルトガル語と書いてありますが，これはなんでもないので，私がロシア語をやっている時に，外国人がやってきまして，製鉄所の人ですが，ロシアとつながりを持たなくてはいけないから，ロシア語をやりたいから教えてくれということで，教えているうちにこちらもポルトガル語をある程度やらないとまずいのでやりましたね。

それから，アステカの話になります。ブリタニカの百科事典についていた子どものためのブリタニカがありまして，それは極彩色の美しい絵がいっぱい出ているのです。Aの最後にアズテックというので，アズテックってなんだろうと読んでみると，メキシコの原住民で，非常に特異な部族で，例えば，太陽というのは死滅する恐れがある。毎日太陽が沈むのは，死ぬために沈むのだ。だから，太陽に力を与えるためには，生きた人間の心臓を取り出して，ピラミッドの上に置くこと，その間は必ず太陽は翌朝また昇ってくれるという信仰を持っているのです。そういう血生臭い部族なんですけれど，それの残した花の文化，蛇の文化など，非常に美しい文化を残しています。これは例のスペインのコルテスが入ってきて，アステカ

が心臓を捧げているのを見て，この連中を生かしておいたら大変だというので，皆殺しにしたという話がありまして，そのアステカにすごく興味を持ちまして，さっき申し上げたあれですよ。何か自分の趣味，おもしろい趣味があったら，それを勉強する手段としての外国語です。それで，私はその時できる外国語というのは英語ですから，英語でアズテックの文献をどんどん集めて，それを読みました。1冊の本を読み上げたということは快感ですね。その快感を味あわせてくれたのがアステカですね。そのからみでスペイン語も，かじった程度のことです。やはり今関わっているのは，英語であり，イタリア語であり，ロシア語である。それはすべてほぼ独学でやってきたものだということです。

質疑応答

(1) 留学は必要か。(2) 日本人同士で外国語を喋るというのはなかなかやりづらいが，そういった場合のこつというものはないだろうか。(3) 日本における英語教育について先生はどう考えるか。

荒川　最初の留学のことですが，これは，私自身が留学できなかった最後の世代だろうと思います。私のちょっと後からは留学できました。私が仕事で中国に滞在したのは82年です。日本語教師としてでした。しかも33になっていました。だから，中国人の恩師というのを持てなかったのは，今だに残念だという気持ちがあります。ただ，最初に中国へ行ったのは，25歳でしたが，今の学生さんのように，短期留学とか学生時代に行くということが全然なかった。行けなかったのです。卒業してからも，大学院時代に行くチャンスはあったのですが，なかなか行けなかった。そういう難しい時代でした。それで日本でできることは日本でしてきたということです。33歳で行くまでに国交が回復して中国からいろんな人が来るようになりました。その前には，本当に生の中国人といいますか，長いこと日本にいる中国人はいましたが，いなくて，その中で自分で勉強したというのは，主として小説とか読みものを通してでした。

ですから，最初私が中国からの残留孤児の家族と接した頃は，「おまえの中国語は非常に高級知識人の喋る中国語だ」，「言葉が難しすぎる」。つまり，大衆のことばというのが喋れませんでした。難しい言葉はたくさん言えたのですが，ふつうのことばが喋れなかった。それは日本で勉強したからなんです。そういうことがあって，中国に行った時に，一番最初に覚えた言葉というのは，子どもが生まれたからなんですけれど，“好玩”という，「かわいいね」という表現なんです。面白い言い方なんですが，そういうのは，中国で初めて耳から覚えました。中国から残留孤児の人たちがたくさん帰ってきた時も，そういう人たちと接した中で覚えた言葉というのは，本当に耳から覚えて，それがどんな場面で使われたかということさえ覚えているくらい記憶がはっきりしています。だから，そういうことを通じて，日本であ

る程度できると思いました。通訳の経験も日本である程度しましたから，留学しなければ語学はできないかというと，そうではないと思いました。

昔，ドイツ語で関口一郎という人がいましたが，そういう人なんかは全然ドイツに行かずに大きな教本を書いているのです。だから，行けばなんとかなるということは，非常に安易であって，行くまでに日本でできることがたくさんあって，早い時期に行ってしまうと，こんなことは日本でやってくればよかったということになると思うのです。そういうことがないように，行くまでにたくさん日本でやれることをやっておく。しかし，向こうでしかできないことはやはりあると思うんです。特にスラング的な言葉というのは，向こうに行けばすぐできる。子どもだったら例えば“討厭”“打死你”という言葉があるのですけれど，いやらしいとか，おまえなぐって殺してやるとか，そんな言葉をすぐ言うのですが，そんなことばは日本では聞けませんから，覚えられないんです。そういうのがまず耳から入ってきますね。だから，日本でどこまでできるか。日本でできる限りのことをやっておくというのが基本だと思います。

日本人同士で中国語が勉強できるかということでしたね。会話ができるかということでしたが，私たちはやりました。というか，昔は本当にそういう機会がなかったので，中国人一人を囲んで皆で中国語を喋るとか，日本人同士もある時間は中国語を喋るということをしました。今の学生は逆に機会があるからできないのか，よくわかりませんけが，やらない。ちょっともったいないと思います。最近は，私の家庭なんかだと，子どもと英語で喋ったり，電話も英語で返ってきたりすることもあります。結構日本人同士で冗談をいいながらやることがあって，平川祐弘さんという比較文学の先生がいて，その人と中国で3カ月ご一緒しました。その時も，その先生はイタリア語，フランス語，中国語を勉強されていて，中国語で電話がかかってくるんです。それで私も中国語で返す。ある時私がドイツ語でその家に電話をかけたら，娘さんがドイツ人と間違えて，その家の人をからかったことがあります。日本人同士でも，やる気さえあればできるんじゃないかと思います。

最後に，日本の英語教育の問題ですが，これはマレーシアとかシンガポールと同じですけれど，そういうところではやはり英語ができないとやっていけません。ところが日本ではやっていけます。英語ができなくても。だから，ごく一部の人ができればやっていける。ただ日本で英語教育というのは日本の外来語のためということがあります。つまり，英語教育というのは，外国人と喋るためじゃなくて，日本語における外来語を理解するという，日本語の中に含まれているいろんな英語的要素，外来語的要素，そういうものの理解のために逆に必要ではないかと思っているくらいです。日本人に英語ができないのは，そういう必要がないからなんです。それはもう仕方がないことです。ちょっと外国に行ったりすれば，喋らざるをえないし，日本がそういう環境に置かれてないことはむしろ幸せではないか。英語を喋らないと生きていけないという人はごく一部にはいるでしょうが，全体としては必要ない。日

本語でいろんなことができる。大学でも日本語で講義ができるんです。これはすばらしいことではないかと，むしろ思っています。

質問2

友人の中に会話になると群を抜いているが，読む方が全然駄目だという人がいる。読む，聞く，話す，はどこが違うのか。特に，話すことと読むことは別のことと考えたほうがいいのか。

千種　これは，外国語だけじゃないですね。日本語でも同じです。私は，書くほうはいいのです。書くのは楽しくて，まさに優越感にひたりながら書くのですが，人前で話すのは駄目ですね。会話できないですね。文章は一生懸命読むのですが，会話はほとんど不可能です。でも，何度かイタリアに行って思うのですが，とにかく文法の基本は身につけていますし，ボキャブラリーはありますし，ある程度のヒヤリングの能力はあるらしくて，3日目くらいからはだいたいわかりますね。3日目から皆が回りで喋っているとわかってきて，5日目くらいから気がついたら喋っていますね。だから，特に，書く話すことは流れといいますか，そういうことじゃないでしょうか。たぶん会話は上手だけれど文章は下手，書けないというのは母国語でも同じじゃないかと思うのですが。

荒川　昔は，読めるけれど話せないという人が多かったですね。ところが今の教育というのは，コミュニケーション能力をつけるということで，まず，喋るということに重点を置いています。その結果，今度は読めなくなっている。読める人は，今，先生も話されましたけれど，何を言っているか聞いてわかる。ところが，逆はなかなかできない。喋るけれど読めない。これはやはり高橋先生がよくやらせていますけれどね。読む練習というところに入っていかなければいけない。これまでは会話の練習に重点を置きすぎていたと思うんです。この会話と，読む・書くというのは，基本的にはつながっていると思います。つながっていると思うのですが，使う語彙が違っていたり，構文が違っていたりする。構文がやはり書き言葉では複雑になります。話し言葉というのは，そんな複雑なことをいってもわかりませんから，短い文を続けて言うしかない。しかし，書き言葉は長い言葉を使いますから，やはり質が違う。言語によっては，書き言葉の体系と話し言葉の体系とが違うのがある。中国語などは，知識のある人ほど話し言葉とかけ離れた文章を書きます。これはかなり訓練をしないと書けません。ただ，今の中国の若い人たちの書くものは，話し言葉に近いですから，少し語彙を増やして構文も練習すれば書けるようになると思います。要するに，話し言葉で喋れて，聞けるというのは，これは本当は基本だと思います。その上で，読む練習をもう少し深くやれば，つながっていくと思います。昔の人は，なかなかつながらなかったというか，話す練習というか，機会がなかったのです。